

四旬節第2主日 (ルカ 9:28b-36)

腹黒い古狸でも、イエスは変容させてくださる



いよいよ、洪助祭の司祭叙階式が近づいてきました。私も司祭叙階式前日のことを今でも覚えています。叙階式前日のその日、私とあと二人、それぞれの任地を告げられました。

「〇〇さんは福江教会の助任で働いてください。〇〇さんは三浦町教会の助任で働いてください。中田さんは、浦上教会の助任で働いてください。」二人の安堵の目が私に注がれていました。三人で誰がどこの助任だろうかと思像していたのですが、「浦上教会助任に自分はないだろう」三人ともそう考えていたからです。

その日はずっと眠れずに、カトリックセンターの部屋から浦上教会を眺めておりました。どうして私が務めることができようか。川添神父様のもとでお仕えできるだろうか。そんなことを考えていたら、眠れなかったのです。

叙階式まであと6時間という、朝4時に、ようやく眠気が来たので布団に入りました。すると先輩から冗談で言われていた通りの夢を見たのです。「ときどき、受階者の中には、寝坊して叙階式に遅れる夢を見る者がいるんだ。今年受階者はどうだろうね。」

見事に同じ夢を見ました。叙階式はすでに終わり、他の二人は信徒会館の祝賀会で壇上に上がり、お祝いを受けています。その様子を、私はパジャマのまま信徒会館の外から窓越しに眺めている夢でした。びっくりして飛び起きたら、まだ朝の5時でした。あれから33年経ちました。

あれから33年。私はどうなったのでしょうか。変わった部分と、変わっていない部分とがあると思います。先輩から「右」と言われたら「右」を向いていた素直さは無くなってしまったかも知れません。「倒れるまで働き続ける」という一途な気持ちも、無くなってしまいました。

古狸になり、もっとも嫌っていた腹黒い人間になり、すれ違ったときに感じる聖性の「香り」も感じられなくなりました。それはイエスの「様子が変わり、服は真っ白に輝いた」(9・29)という姿とは大違いです。与えられた使命を果たすたびに、イエスはいよいよ栄光を帯びていく。それに対して私は、年数を重ねれば重ねるほど、煮ても焼いても食えない代物になってきました。

何が、違うのでしょうか。イエス様は御父の使命を生きる中でついに輝きを放つまでになります。私は33年の歳月だけが増し加わっただけで、シミだらけ、しわだらけ、栄光に輝くイエスを映す鏡にさえなれていません。これまで何かが、足りなかったのだと思います。

そこで考えました。ペトロが「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」(9・33)ここからの一連の言葉を言い終えたのちの出来事に、私に欠けていたことを見つけたのです。それは「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。」(9・34)ここだなと感じたのです。

つまりこういうことです。イエスに聞き従っていくと決めた生き方だけれども、ときどき、雲が現れて覆われ、心が閉ざされてしまう。それはもちろん、驚き怪しむような体験ですが、そこで何をしたかが問われているのではないのでしょうか。

9章35節には「すると、『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた」とあります。私はこのみことばに逆らい、イエスに耳を傾けてこなかったのではないか。その結果、腹黒くなり、シミだらけしわだらけになり、悪臭を放っているのではないか。そう思ったのです。

雲が現れて弟子たちを覆ったとき、彼らは恐れしました。恐ろしくなりましたが、弟子たちはイエスに聞き従ったのです。それなのに私は、恐ろしくなったときイエスに背を向け、ありとあらゆるこの世のものに依存して、ここまで来てしまった。だから、輝きも、聖性の香りも、何もかもなくなってしまったに違いない。それが私の司祭生活33年間だった。そう思えてなりません。

肉親の父親が2008年に旅立ち、母親が今、五島中央病院で二ヶ月近く投薬治療を受けて闘病しています。真っ先に頭に浮かぶことは「イエスに委ねられた使命に生きる」ではなく、どうやったら死なない程度に働き続けることができるだろうか。どうやったら不安の中闘病している母親を慰めることができるだろうか。普通に誰もが考えるようなことで頭がいっぱいなのです。

「雲が現れて彼らを覆った。」今まさに、雲が現れて私の周りを覆っています。弟子たちは恐れていましたが、イエスに聞き従うことを捨てなかったのです。なぜ私には、イエスに聞き従うことが真っ先に浮かばないのか。恐ろしい結末をつい考えがちな場面で、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」という声はどこへ行ってしまったのか。

しかし神は憐れみ深い方です。折り返しを過ぎて初心も忘れ果てた古狸にも、「顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」そういう体験をさせることがおできになります。神にしかできない奇跡をそばで見せて、私を変えてくださるのです。前日までミサができなかった人がその日からミサをささげる。前日まで、罪を赦す権能を与えられていなかった人が、罪の赦しを与える。

こうしてそばにいる人がすっかり姿を変えるのを私に間近で見せてくださり、もう一度「イエスに聞き従う司祭」に生まれ変わらせてくださるのです。「生涯に一度だけで良いから、すぐそばで、司祭が誕生するという奇跡を見させていただきたい。」そう願っていましたが、それは思いがけず早くやって来ました。

私にもあと15年くらいは与えられるかも知れません。その間、心の中が雲に覆われるようなときがまたやって来ても、変わらずイエスに聞き従う司祭でありたいと願っています。聞き従って姿が変わり、真っ白に輝き、自分のために何も残さず、イエス様にお返ししたいものです。